

そして、その私たちが新しい私を生む。
私のなかに新しい私たちが生まれる。

半世紀前、私は岐阜市内の高校に入学しました。1学年は500名。山あいの小さな集落に生まれ育った私にとって、それは鮮烈なスタートでした。上級生を含めて1500名、先生は100人に及びます。私はその誰をも知らないし、その誰も私を知りません。その途絶感と孤独感を強く緊張させました。

具体的な日常がどのようなものであったか、今は、余りに多い教室に迷って上級生のHR教室に入ってしまったことなどが微笑ましく思い出されるぐらいです。しかしあるときから、この始まりが私の今に真っ直ぐに繋がっている、現在の起点がこのときにあるとの思いをしきりに抱くようになりました。まったく新しく出会った同級・上級の仲間によって、私のなかに「新しい私たち」が生まれ育ち、そしてその私たちが、私のなから今までの私が知らない新しい私を生み育ててくれた、のだと。

高校生としての3年間が人生の大きなエポックとなることを、そのような尊い3年を大谷で歩んだ若い世代の情熱的な文章を、昨年の本校のパンフレットに見つけて、半世紀近いときを隔てての嬉しい共振を感じました。ここに再載して皆さんの希望に資したいと思います。

大谷高校に入学するまで、仲間とともに何かに力いっぱい取り組むことの「楽しさ」と、それがうまくいかなかったときの「悔しさ」を知りませんでした。部活の試合で負けて悔し泣きするのは、青春映画やドラマの中のことだと思っていました。しかし大谷での3年間を経験した今は、本物の「楽しさ」と「悔しさ」があることを知っています。(中略) そこには、本気で取り組んだときにだけ味わえる「達成感」と「挫折感」がありました。そして、この「達成感」と「挫折感」こそが、私が現実にはないと決めていた「楽しさ」と「悔しさ」の正体なのだと思います。大切なのは、いつも一生懸命に取り組むこと、ともにがんばる仲間がいること。大谷高校で過ごした3年間は何ものにも代えがたい思い出です。

(2015年3月卒業 谷朋香さん…2016入学案内より)

今年の成人式の日にも、5分の3を超える多くの卒業生が本校に集い、^{ひと}齊しく「大谷の子」であることを確かめ合い、新たな出発を印してくれました。この集いは「私たちは大谷から始まった」という卒業生の声から自発的に生まれて、今年で8年になります。このことは大谷に人生を保たれたもの一人として無上の喜びとするところです。大谷の3年間が、通過する時としてすぐさま過去とになってしまう時ではなく、その人生を貫いてつねに現在であり続ける3年という時であり、場であることを証しする集いであると、慶びとともに重い責任を感じます。

大谷はそのような時が現成する学び舎としてこれからも在り続けたいと思っています。



大谷高等学校長
飯山 等



2016.1.9 卒業生成人式での集合写真